

三島地区生涯学習連携事業

日時 平成10年10月15(木)～
12月17日(木)の全10回

参加費用 無料

定員 百名(各市・町
それぞれ二十名)

対象 島本町、高槻市
茨木市、摂津市、吹田市に
在住、在勤または在学し全
十回参加が可能な方

三島路
ひざくりげ
学ぼう三島の
歴史と文学

郷土撰津 いにしえ通信

平成十年十月一日 第六号

発行
摂津市三島一丁目一番一号
摂津市教育委員会
生涯学習部 生涯学習課

募集方法

往復ハガキによる

①記入事項 現住所、氏名

郵便番号、年令、電話番号

返信用あて先を明記のこと

②あて先

〒五六四一〇〇四一

吹田市泉町一―三一四〇

吹田市教育委員会生涯学習課

三島地区広域事業事務局

☎〇六一三八四―一二三一

内線 二八五六

③締切り 十月六日必着

結果は十月十二日までに通知

◎平成十年度三島地区生涯学

習連携事業として、郷土の歴

史と文学を様々な分野から学

ぶ連続講座が開催されます。

三島地区各市とも多様な講

師をおむかえして楽しく学べ

る講座です。

摂津市では、十二月十日に

摂津市生涯学習課主査・茗荷

充幸氏、十二月十七日に花園

大学文学部教授・服部敬氏の

両氏の講演が開催されます。

詳しくは生涯学習課まで。

お知らせ

大阪府内で開催される展示・

講演会・シンポジウムなどの

情報をいち早く、お知らせ

します。

と き

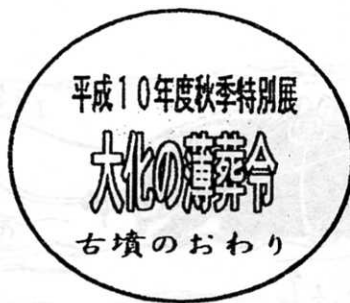
十月六日から十二月六日まで

と ころ

大阪府立近つ飛鳥博物館

南河内郡河南町大字東山二九九

番地



開館時間 午前十時から午後五時

休館日 毎週月曜日

ただし、十一月二十三日は開館

二十四日は休館

◎期間中は、地階ホールにて歴

史セミナーや歴史フォーラム

も開催されます。

☎ 〇七二一一九三一八三二二

おじいさん・おばあさんに聞きました
 摂津市域 ちよつと昔のくらし
 その6 米作り(一)

米作り作業の一年間

摂津市域はもともと米作中心の農業地域でした。現在の機械化された米作りと違って昔はたいへん手間暇のかかる作業でした。

米作りの一年間の流れを、直接的な作業のみまとめてみました。八町での聞き取り

田起こし (あら起こし)

冬の初めに、牛にカラスキを引かせて、田の土を粗く起こす。

あえ

田起こししておいた土を、クワで細かくくたくだく。

種モミの用意

カマスに入れて、一週間ほど川や池につける。

苗代作り

きれいに均したウネの上に

種モミをまき、灰をかぶせて苗を育てる。

田の虫取り

主に子どもが、学校から連れられて、苗の葉についた虫の卵を取る。

水入れ

田んぼに水路から水を引き入れる。

代かき (田こなし、田こしらえ)
 牛にウマグワ(マグワ)を引かせて、土をやわらかくし平らにする。

元肥入れ

代かきのときに肥(人糞)を入れる。

苗取り

苗代の苗を取って束ねる。

田植え

稲の苗を田んぼに植える。

水入れ

田に水を入れ続ける。とき

には水車でくみ上げる。

草取り

何度も雑草を取る。

追い肥

草取りの途中で肥をやる。

土用干し (干し上げ、中干し干し田)

土用のかんかん照りのころに、水を抜いて、田を干す。

敷き草

刈ってきた草を、肥料として敷く。

イナゴ取り

稲を食い荒らすイナゴを取る。

稲刈り (田刈り)

稲を刈って束ねる。

稲木(フナギ)かけ

束ねた稲を、イナギに架けて干す。

稲こき (脱穀)

脱穀機を使って、稲束からモミをはずす。

日干し

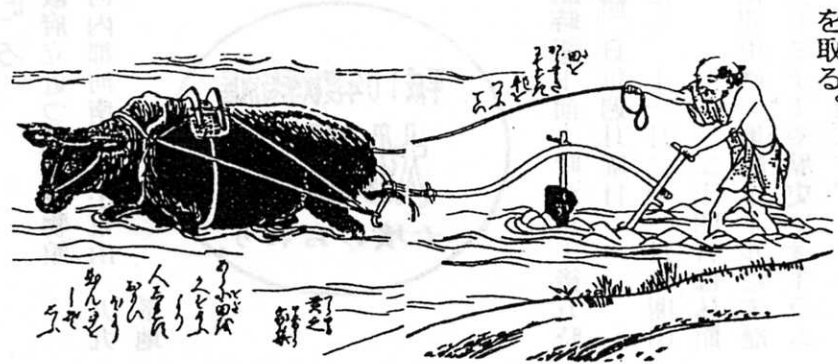
モミをムシロに広げて干す。

モミすり

モミすり機で、モミの皮をむいて玄米にする。

精米

食べる前に、精米機でヌカを取る。



体験談

「あんな苦労は二度とでけまへんなあ。みんながやってきたからでけたのです。」
 「一番しんどかったのは草取りです。真夏の日には照らされて、腰かがめてなあ。」

担当 (源)

郷土史コーナー

◎前号の『味舌の村々』の続き

坪井村 — 味舌五力村の一つ

境川右岸に位置し、対岸は三宅郷太中・小坪井両村、村の北西端を亀岡街道が通り、村の中央を茨木村（現茨木市）方面への道が通っています。「天文日記」天文五年（一五三六年）四月一〇日条に石山本願寺（跡地は大阪市中央区）の証如が上洛の際「摂州つばいをくり四五人興二のりて被上候、興もつばい迄行候」とあり、おそらく当村付近から富田村（現高槻市）に向かったものと思われます。村名は慶長一〇年（一六〇五年）の摂津国絵図には大坪井村とみえます。天和三年（一六八三年）の摂津国御料私領村高帳に「坪井村」として四六〇石余が記されています。江戸時代初頭に織田信長の弟長益（有楽）の知行となり長益から

子の大和戒重藩（後の芝村藩）藩主長政に譲られ、以後幕末まで同藩領になっていました。用水は山田川の上堰と、当村と味舌上・庄屋の三力村立会の味舌池（現在の市場池）から取水をしていました。安政三年（一八五六年）には新池も掘られました。当村内に正覚寺と須佐之男命神社があり、同社は坪井・味舌上・正首寺・庄屋の四力村の鎮守社で、明和五年（一七六八年）に神興を新調する際、造作費用は氏地四力村で分担しています。

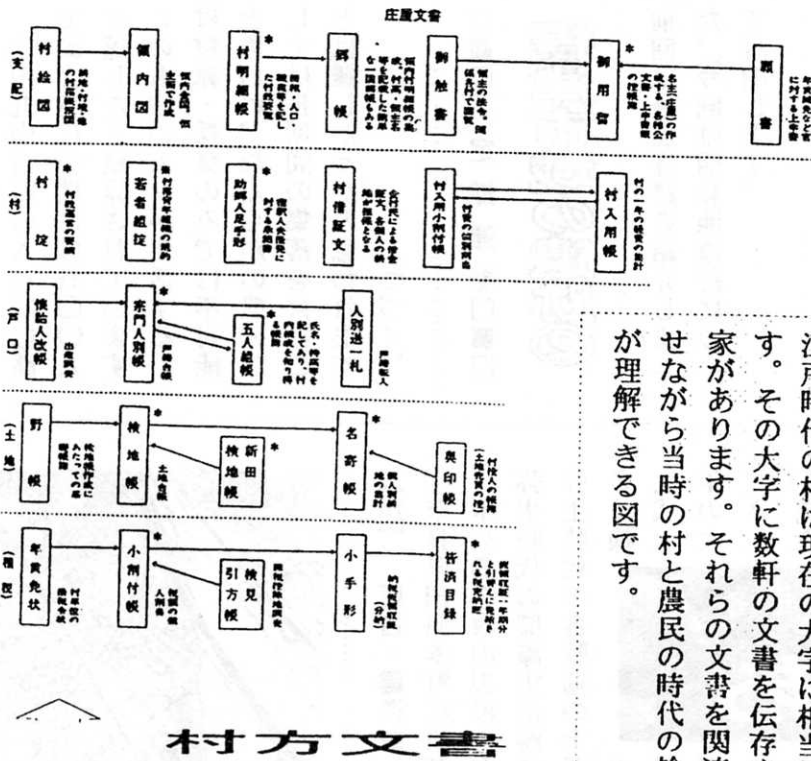
※以上で『味舌の村々』は終わります。

江戸時代の村

江戸時代の日本の人口は平均三千万人と推定されますがそのほとんどは農民であり、領主にとって、漁師・木こり、在郷町の商人も農民であって

村という枠で把握していました。つまり、村は支配や課税の単位であったし、また農民には生産や信仰の共同体でもありました。平均的な村は耕地約五〇町歩、村高約五〇〇石、農家戸数四〇から五〇戸、村役人は名主（庄屋）一名、組頭三名ほど、百姓代数名、それに雑用を勤める定使一名でした。村の行事には本百姓（高持百姓）だけで他の百姓（無高百姓）は参加出来ません。本百姓も均質ではなかったようです。

江戸時代の村は現在の大字に相当します。その大字に数軒の文書を伝存する家があります。それらの文書を関連させながら当時の村と農民の時代の輪郭が理解できる図です。



※平凡社「大阪府の地名」及び柏書房「農民生活史辞典」より

担当 (茗荷)

考古雑話

第 6 回

わかりつつある縄文時代の生活⑥
三内丸山遺跡の発掘と縄文時代の生活

キーワード② 「長い」

前回は三内丸山遺跡を理解する上でのキーワードのうち「大きい」について説明しました。今回はつづきとして、「長い」というキーワードについて説明します。

長いとは、長期にわたる生活の痕跡が発見されたことをさします。今から約五五〇〇年、四〇〇〇年前の時代（縄文時代前期～中期）にかけて約一五〇〇年間も集落が営まれていたことになります。集落の規模は各時期によって差はありますが、おおむね安定した文化を育んでいたものと思われます。

この間集落の中では、前号で解説した大型の掘立柱建物や大型竪穴住居や盛土遺構などが計画的に建てられていました。また集落域の外には、ゴミ捨場、墓、粘土採掘穴な

どが配置されていました。これらの状況は現代の「都市計画」と比較してもひげをとらないほど高度なものです。

さらに重要な植物供給源であるクリ林まで発見されました。遺跡の縄文時代前期と考えられる層から多量（全植物遺体中約八〇％）のクリの花粉が検出されました。この八〇％という数字は三内丸山遺跡の人々がクリを主食として計画的に栽培していたと想定するに充分な数字といえます。彼らは大規模に管理された農園を経営していたのです。

これまで農耕のはじまりは縄文時代晩期から弥生時代にかけての時期に大陸から導入される稲作がはじまりとされてきました。しかし、三内丸山遺跡ではクリ花粉以外にもヒヨウタンやゴボウの植物遺体が発見されており従来の定

説がくつつがえり縄文時代前期の段階で農耕が行なわれていた可能性が高まってきたと言えます。

三内丸山遺跡の人口は最高で縄文時代中期には五〇〇人に達したと試算されています。この数字の人々が生活するには狩猟・採集のみでは不可能と思われ、なんらかの農耕なしでは長期間の集落を営むことは難しかったと思われる（つづく）

不定期連載

撰津地域の遺跡②

前回は蜂前寺跡を紹介しました。今回は明和池遺跡について説明します。

【所在】 撰津市庄屋

【種類】 集落跡

【時代】 古墳時代後期

（大阪府文化財地名表より）

◎昭和八年、須恵器の完形品が採集される。（現味舌天満宮蔵）

◎昭和六二年、大阪府教育委員会が発掘調査を実施。

◎現在も周辺地域において調査中



【か】 唐古・鍵遺跡

◎奈良県田原本町に所在する日本列島有数の規模を有する弥生時代の環濠集落跡です。

弥生時代の各時期の土器が数多く検出。弥生式土器の編年の大立され。○また木器な稲作農態が解るなど大きな発見がありました。○近年の調査では、多量な青銅器の鋳型も出土し注目を集めています。



担当 (伊部)